年報筑波社会学　第15号（2003），106～111頁.

《書評》

若林 幹夫 著『漱石のリアル――測量としての文学』

紀伊國屋書店，2002年，329頁，2500円.

小倉　敏彦

本書は夏目漱石の作品群の精緻な読解を通じて、「測量装置としての漱石が明治から大正にかけての日本近代の社会の風景や地形をどのように見たのかを、その作品に即しながら分析すること」（30頁）を目的とした研究である。漱石の小説を自律的な芸術作品として扱うのではなく、近代社会の特質を刻印した測量図として読むこと。と言っても、著者は漱石という作家を、明治の世相や人間模様を虚心に捉えた透明な媒体のように考えているわけではない。漱石が高感度の測量器とされるのは、彼の執筆活動がそもそも「世界を如何に観るべきや」という主体的な意志に発し、またその働きかけの「対象によって極めて深く傷つけられ、あるいは侵されることを通じて形成された」（26頁）からだ。そのようなパトスを抱えた作家にとって、社会を記述するということは客観的な描写や高所からの気楽な批判以上の何ものかであったに違いない。

本書が「夏目漱石の作品を対象とする社会学」に留まらず、「夏目漱石の手による社会学」（31頁）をも問題にしようとする理由は、ここにある。漱石の小説が一種の「社会学的な記述と分析」として読めるのは、そこに彼の社会学理論が披瀝されているからではない。漱石の「社会」に対する独特な距離の取り方それ自体が、平板な社会の見え方を異化する「社会学的な記述と分析」なのである。そしてその記述対象との距離の取り方、つまり測量の作法こそが漱石文学のリアリティであり、社会学的思考を刺激する部分なのだ。本書のタイトルである「漱石のリアル」および「測量としての文学」に込められた意図は、このように理解することができるだろう。

では、その内容を概観してみよう。本書は序章と終章と、六つの章から構成

されている。まず一章では『三四郎』に描かれた、熊本から上京した主人公が東京という都市の「激烈な活動」の様子を前にして立ち竦むさまを、日露戦争後の日本人が「近代」を経験していった原風景として分析する。たとえば、「故郷」を古ぼけた懐かしい「過去」として発見させる汽車での長距離移動。破壊と建設が同時進行する町並みの変化の速さ。東京市内に張り巡らされた路面電車を自在に乗り継ぎ、複数の場所を行き来する群衆。見知らぬ者同士が互いに無関心なまま暮らす都市の日常。かつてない規模の人々が同じ時間と空間を共有することを可能にした鉄道や新聞、等々。著者によれば、これらの現象は漱石の描いた様々な人間関係を条件づけている、物質的な基盤でもあった。

二章では初期作品から『三四郎』にいたるまでの小説技法の変化を、漱石が近代社会の特性を記述するために試行した過程として論じる。たとえば『我輩は猫である』や『虞美人草』では人物の行動が描かれるさい、語り手の道徳判断や批評が前面に押し出されていた。それに対し『三四郎』では周囲に刺激されやすく、世界へ働きかける能動的な意志をもたない主人公の眼から物語が描かれている。著者によればこうした叙述の変化は、単一の価値観（勧善懲悪）の下に世界を記述するのではなく、相対的で両義的な意味がせめぎあう世界を認識しようとする（近代小説に固有の）要請から生じている。つまり、故郷の共同体を離れたばらばらの個人が蝟集する東京において、そうした共通の背景をもたない〈他者〉たちの交渉をリアルに描くためには、全ての事態を見通す超越者や世界を変革していく行為者の視線ではなく、局所的な状況に留まりつづける傍観者＝報告者として三四郎が造形される必要があったのである。

ところで、他の章が「小説の中の社会」の分析であるのに対し、二章は「小説」という容器そのものを問題にしている点で特記に値する。社会学者が文芸作品を扱う場合、その作品が書かれた当時の社会状況を直裁に反映した「史料」として解釈するか、作家が抱えていた（とされる）「思想」が直に論じられることが多く、作品の実体である「言葉」についてはあまり注意が払われてこなかったからだ。どちらの読み方も言語の透明性が強く仮定され、小説という表現の特性やジャンルの制度性が疑われていないのである。社会学の領域ではいぜん無視されがちな小説の特殊近代性（なぜ虚構の言説が現実に似ているのか）について一章を当てた著者の意欲を、評者は高く評価したいと思う。

三・四章では『それから』『門』『彼岸過迄』の中期作品を取りあげる。三章では『それから』を題材に、情誼や徳義にもとづく旧来の人間関係（『坊ちゃん』における清や山嵐との関係のような）を押しのけ、〈貨幣〉と〈生活欲〉が新しい社会道徳になっていく様子が分析される。四章ではこれらの作品が描く私生活の領域（室内）の外部に、個人を魅惑する／脅かすものとして「路上」や「帝国」の世界が広がっていることを指摘する。著者によれば、『それから』は「室内の趣味の小宇宙が路上の生活の論理に脅かされ、『室内の人＝趣味の人』であった代助が『路上の人＝生活の人』になる物語」であり（157頁）、職を求めて軍需産業の盛んな都市を転々としてきた『門』の「夫婦の軌跡は日本と満州、韓国をめぐる社会の地形とそれをめぐる地政学的な変動を背景とし」ている（182頁）。また『門』の夫婦が昔裏切った安井や『彼岸過迄』に登場する森本は、失地回復や国外での雄飛を求めて大陸へ渡った不穏な人物だが、彼らはときに魅惑的な冒険者として、ときに日本の帝国主義的拡大に対する不安の表象として、主人公たちの生と交錯するのである。

五章では『行人』『こころ』『道草』の後期作品を特徴づける陰鬱な雰囲気を、フロイトの〈不気味なもの unheimlich〉を鍵概念にして分析する。前の章が明治社会や海外という外部の文脈に解釈を拡げていったのに対し、ここでは小説に描かれた「自己」や「現実」の構造が垂直に掘り下げられているとも言えよう。これらの小説が描く陰気な悲喜劇は、自己同一性（時間的な持続感や社会的な役割・行動の一貫性）の疑わしさに由来するものだからである。

たとえば『道草』の健三がかつての養父との再会に脅えるのは、「〈現在〉の起源にあったはずの〈過去〉が、〈現在〉の自分にとっては疎遠な物のような相貌で現れてくる」（219頁）からである。また『こころ』の先生は叔父に裏切られた経験から誠実に生きることを志していたにもかかわらず、結果として親友のKを裏切り自殺に追いやってしまう。しかもそれまでの行為の意味は、Kの自殺の後に初めて浮上するのだ。このとき彼は「自身の行為の意味を、自身の心理や意図を超えたもの、確かに自分自身がおこなったものでありながら、した後から驚き、恐怖を感じるような異和をもつもの」として了解するのである（228頁）。それは自分が自らにとって一個の〈他者〉として現われ、自身の存在の核を深く照らし出すという意味で、まさにフロイトのいう〈不気味なもの〉

の回帰と言えよう。しかし、著者によればこうした虚偽や異和の感覚は私たちにとっても切実なものである。それは互いに〈他者〉として世界を生きるという人間の生存条件に基づいているだけでなく、近代社会が「そのような〈他者〉性を顕在化させるトポス」を内包しているからだ（229頁）。

評者が最も興味を引かれたのは、この五章の議論である。なぜなら、漱石文学の特質と魅力は上のような自己存在や現実感覚の危うさにあると思うからだ。この濃密な幻想性こそ、他の作家の作品では得がたいものなのではなかろうか。逆にいえば本書の他の章で論じられる漱石は、近代日本の未来を鋭く見通した知識人、あるいは世の中の道理を熟知していた人間通のほうに比重が置かれていて、評者には少し物足りなかった。評者はそうした整理整頓された漱石よりも、神経性胃炎に苦しみ被害妄想で周囲に当たり散らす子供じみた漱石のほうに惹かれるのだが、実際「社会」に対する漱石の眼差しは、著者が考えるよりもずっと愚鈍で適正な距離を欠いた「片付かない」ものだったのではないだろうか。漱石が、彼が生きていた明治社会の現実を織りなす「図」と「地」の稜形にきわめて敏感だったことは間違いない。しかしその敏感さには物が見えすぎるゆえの困惑や畏怖も混じっているはずだ。つまり彼は平凡に見える「図」がいつのまにか形を変えていたり、隠れていた「地」がふいに露わになってしまう瞬間を心底畏れながら、本人にも自覚されないままそれらの浸透や反転を作品化していたのである。五章の議論は後期漱石に顕著なそうした幻想性と日常空間の逆立を正面から分析していると思われる。

六章では遺作『明暗』を、結婚を結節点に複数のコミュニケーションが重奏する「交通小説」として分析する。この作品の特徴は多彩な〈声〉の横溢にあるが、著者によればその多声性は物質的な交通・通信技術によっても支えられている。人々はひっきりなしに電話や手紙で連絡を取り合い、電車や人力車で絶えず行き交うのだが、それはこの小説が単一の主人公を軸とせず、「津田と妻のお延を中心に、お秀、吉川夫人、小林といった複数の人びとの関係の網の目を描いており、その関係の網の目を支える物質的な基盤として、それらのメディアが小説世界の中で作動し続けているからだ」（262-3頁）。小説言語の多声性とは本来、語り手が属する集団や階層や性別の異質性に由来するものだが（バフチン）、著者の解釈では、近代のテクノロジーはそうした異質な場所から

語られる〈声〉の空間を物理的に再編することにもなったのである。

しかしながら、こうした技術決定論的な説明がどこまで『明暗』のリアリティを捉えているかは、やや疑問である。もちろん、著者のいう「物質的」あるいは「現実（リアル）」には、汽車や都市や科学技術などの物理的な側面と、経済や国際政治や婚姻体系という社会的な側面がある。六章では、自由な意志で結ばれた津田とお延の結婚が経済的な依存関係や親族間のネットワークに埋め込まれている様子が分析されているが、これらの関係の網の目も彼らの生存に直接関わるという意味で「物質的」な基盤なのである。さらに著者は、近代以降の日本人が「恋愛」や「（自立的で個性的な）個人」という脆弱な観念＝信念を重視するようになることで、そうした社会関係の構造に揺らぎと過剰さがもたらされたことも指摘している。

だがいずれにせよ、漱石の描いた「現実」とはそうした構造的な側面だけではないと評者は考える。『行人』や『こころ』はもちろん、多くの人々が饒舌に語り合う『明暗』でも、そこに強く感じられるのは人間の絶対的な「寂しさ」である。どれだけ誠意や熱意をもっても相手と意志疎通ができず、にもかかわらず互いの生を拘束し影響を与えずにはいられない『明暗』の切迫した孤独感。『行人』の一郎がいう「心臓の恐ろしさ」や『こころ』の先生とKを絶望させた「淋しみ」もまた、漱石が描いた社会生活の現実なのであり、それは私たちにとっても強烈なリアリティを喚起するはずである。

以上、各章の議論を概観してきた。最後に本書全体の主題に即してコメントを述べたい。冒頭で述べたように、本書の狙いの一つは「夏目漱石の手による社会学」を明らかにすることであった。漱石を肴にした文化研究は多いが、本書が類書と一線を画すのはこの課題にあると思われる。著者が本書の企図を次のように述べるのも同じ問題関心に基づく。すなわち、「測量されたこと」だけでなく「測量すること」の社会性や歴史性をも問題にすること（30頁）。漱石の小説を「社会記」（内田隆三）として読むこと（326頁）。理論や方法を作品に当てはめるのではなく「漱石のテクストを読み進むことを通じて私の思考が共振し、活性化していった過程を、『社会学的思考』の一つのかたちとして示」すこと（327頁）。これらの言明は著者が漱石の社会学を、社会を記述する漱石

の「言葉」のうちに見出そうとしていることを改めて強調していよう。

では、著者はこの課題にどこまで迫ることができたのか。率直にいうと、本書にはあえて漱石文学という測量装置を通さなくても、つまり他の作家の文章を素材にしても十分論じえた議論が多いように評者は感じた。例えば『行人』の一郎が吐いた文明論を承けて、近代科学がもたらす（ハイデガー的な）不安について論じた部分（240-247頁）などはその典型だろう。たしかに百年近く昔の文学作品にこれだけの多様な主題が見いだせること自体、驚くべきことではある。しかしその名誉は、断片的なモチーフから抽象度の高い近代社会論を展開していく、著者自身の鮮やかな手腕に帰せられるべきものではないか。

逆にいえば、本書の魅力の一つはそうした著者の明晰な論述にあるとも言えるだろう。模糊蒙昧とした物語の筋から〈社会の風景〉や〈トポス〉といった「空間的な概念図」を抽出し、ポランニーやアレント、デュモン、レヴィ＝ストロースなどの社会理論を用いて複雑に絡み合った人間関係を解剖する著者の分析力には、素直に感服せざるをえない。ただ評者には、そうした切れ味の良さが、漱石が描いた「社会」の像よりもやや明瞭すぎるようにも感じるのだ。

その意味で、漱石の文体を直接論じた二章と、後期漱石の小説世界の特徴を論じた五章は、漱石という測量装置の秘密に触れた、やはり重要な考察であると思う。漱石の「社会」に対する距離の取り方は結局、漱石の書いた「言葉」の上にしか読みとれないからだ。また五章のところでも述べたように、漱石の「現実不適応者」の側面にこそ、平板な社会認識を覆す力が宿っていると思うからである。著者は「あとがき」で、漱石の描いた世界がごく狭いインテリの現実に限られていることを指摘しているが（325頁）、むしろそうした視野の狭さや偏執狂的なところが漱石の社会学の面目なのではないだろうか。たとえば漱石よりも社会科学の知識に通じていたであろう鴎外、実社会の過酷さを感得していた啄木、あるいは厚顔な渡世術に長けた藤村を題材にして、本書のような考察が可能だっただろうか。漱石を読む社会学者は、漱石の言葉を活気づけているこの記述対象との「距離」にこそ敏感でなければならないだろう。

（おぐら　としひこ／千葉大学非常勤講師）